



## 東北大震災被災地 NPO へ支援カンパを送りました

たすけあいあさひは設立以来、市民福祉団体全国協議会（市民協）の会員になっています。全国の福祉系NPO約1300が加入し、相互の情報交換や国行政との意思疎通を図っています。

この会員のうち、約100グループが今回被災されました。本部の方たちが現地に行き状況把握。連絡の取れないグループも多い中、倒壊をまぬがれた各事業所では、ライフライン不通や物資不足の中、スタッフが事務所に寝泊まりするなどしながら、可能な限りの福祉機能を維持しようと努力しています。

現在、仙台に市民協の被災グループ支援の仮事務所を設置中。現地が再起することを心より願います。また新潟・茨城等、震災後即開始された周辺県会員での被災者の受け入れも持続しており、これらの方々の食糧生活物資が継続的に必要です。

たすけあいあさひは会員支援として、3月末市民協に50万円を送金しました。

「お互いさま」を合言葉に、今後も支援を続けていきます。

(新聞紙面では、「東日本大震災・被災地 NPO 支援全国プロジェクト」の名称で活動に参加しています。)

(牧野)

## 利用者様の思い出話

～親なし半四朗の台詞より～

「お月さん またあつしに仲のいい親子連れを見せつけるんでござんすか、親なしっ子の半四朗にや これがいっち罪みな眺め これから 夜道にかけても郷里に帰り、昔遊んだどんぐり山から思いっきり呼んでみたくなりやした……おっとさーん！ おっかさーん！」

この台詞は岐阜で歌舞を題材とした劇団を一家でやっていた關光子さんの思い出話です。

座長であるお父様が、子供から大人まで家族の一員とし、歌舞を楽しんでいたそうです。

關さんも2歳～12歳まで子役時代を過ごされ、小学校へ上がった頃には、学校とお芝居を両立させて、月3回の講演をこなしたり、他の劇団で人が足りなければ助っ人としても活躍されていたそうです。

当時の市川少女劇団にも通っていたとの事。今でも思い出しては口ずさんでいる様です。



その後、伯母が経営する服装学院(孝校法人 多治見文化服装学院)へ進み、デザインの勉強をし、22歳で横浜へ上京。デパートガールとして働き、美容部員となりました。その当時の横浜には、50円ハウスという物があったそうです。(コーヒー・カレー等々) 昔を思い出し、話しだす姿は、無邪気な子供を見ているようでした。

### 4月の句

### 桜咲くホームに始発電車かな

登美子



マグニチュード9という東日本巨大地震による余震の大きな揺れが続いて、落ち着かない日々である。原発の事故も重なって不安な思いの中で、今年は桜の季節を迎えた。そして電力不足による計画停電があり、交通機関への影響も大きかった。

句は、駅での朝のはじまりである。ホームには通勤の人達が始発電車を待つ。いつもと何も変わらない光景が見える。でも今の時期だからこそ、普通の日常がかけがえのないものであることを、この句を通してあらためて感じさせられる。満開の桜の花が明るい。

(榎本 選)